

石牟礼道子文学の始まり

－流民である女の言葉と、身体化された記憶の現れ

李 啓 三

1. はじめに

石牟礼道子（1927-2018）は戦後に地元の歌壇で短歌を発表することで文学に入門した。石牟礼は1950年代後半頃、詩人の谷川雁（1923-1995）との出逢いをきっかけにして九州地域のサークル運動体である「サークル村」に参加することとなり、仲間同士の上野英信（1923-1987）と森崎和江（1927-2022）との交流のなかで「聞き書き」という方法を共有し「サークル村」で活躍した。石牟礼は自分自身を「流民¹である女」と見なすのみならず、水俣病患者や家族など流民に寄り添いつつ水俣病にまつわる社会運動に参加し、この経験に基づいた『苦海浄土－わが水俣病』（1969）を発表し、文壇の領域を越える注目を集めた。それ以降、石牟礼が発表した詩、小説、評論、エッセイ、能など多種多様な文章は単著だけで42巻に至る²。

石牟礼文学をめぐる議論と受容は環境文学としてエコクリティシズムの領域に位置付けられる傾向が目立つ。例えば、日本における環境文学に関わる議論をまとめた『越境するトポス－環境文学序説』（野田研一・結城正美 編、2004）のなかで石牟礼は圧倒的に多く言及される作家となっている。その内容においても「自然を媒介として生じる場所への愛着や親密な共同体の崩壊の感覚」（生田省悟）³、「環境問題をめぐる組織的言行への懐疑と新たな行動の可能性」（結城正美）⁴、「現代文明の中ではほとんど失われてしまったことについて警鐘を鳴らす『言霊』への省察」（ブルース・アレン）⁵などであり、これらはいわゆるエコロジーの言説空間に属すると言える。

その一方で、こうしたエコクリティシズムとは少し異なる問題意識のもとで石牟礼文学の出発地点に着目する研究も行われている。これは、1950年代後半から谷川雁・森崎和江・上野英信と石牟礼道子が参加した集団的文化運動を手がかりにして、その時から盛んになった「聞き書き」という文学的共同性の様式、性や流民にまつわる議論、そして「工作者」（谷川雁）・「媒介者」（森崎和江）など組織化と集団性にかかわる議論の流れのなかで石牟礼文学の原点をすえる問題

意識だろう。そのなかで本稿のテーマにかかわる先行研究には佐藤泉『死政治の精神史—「聞き書き」と抵抗の文学』(2023)、水溜真由美「石牟礼道子と流民」(2018)、井上洋子『「苦海浄土」の円環構造—ゆき女書き書はいかに出されたか』(2018)があげられる。また、佐藤泉(2022)は「『サークル村』が提起した集団的主体による文化運動は、個人を単位とするいわゆる近代文学を覆すものだが、なかでも森崎和江や石牟礼道子の聞き書き作品をこれまで位置付けてこられなかった従来の文学史とは何なのかという疑問」を提起する⁶。これは、佐藤が言った通り、文学にかかわる議論が「個人を単位とする」近代的習俗(ハビトゥス)によってきたために「集団的主体によって生産し、共同性を目指す」様式としての聞き書きが持つ意義を明確化できないできたためだろう。

このように石牟礼文学の議論と受容には二つの流れがあるものの、本稿はこの二つの流れに想定されている共同の前提について考えてみたい。あえていえばこれは、戦後サークル村時代から晩年に至るまであり続けた「能動的で抵抗的主体」としての石牟礼像、そしてその連続線上で石牟礼文学の「政治的可能性」を探るものではないかと考える。たとえば、結城正美(2004)は「環境文学には程度の差はあれ、環境アクティビズムの契機が孕まれている」としたうえで、石牟礼の対談記事を引用しながら石牟礼が「近代という化物に取り組み際に表現手段として物語を選びとった」と言う⁷。また、井上洋子(2018)は「もっともっと底にうごめく階級のメタンガス地帯を直視する」⁸といったような「(短歌創作時代の)詠嘆へのわかれ」を宣言し、集団の価値を唱えたサークル村に辿り着いた石牟礼の姿を提示する。さらに井上は、石牟礼が当時左派文学運動の指導的な媒体だった『人民文学』の「労働者全員が理解できるように方言を使うのはやめよう」という指導方針に従わず、聞き書きのなかで方言が入り混じった話を再現した事例を紹介する。これらによって戦後の左翼が目指した政治的目標とはことなる石牟礼における集団性の意味合いが浮かび上がるだろう。むしろ、石牟礼はサークル村時代以降、本稿で議論する通り高群逸枝の思想とのめぐり逢いや水俣病の闘いのなかで思想的変化をみせてくれる。そして、晩年の石牟礼が水俣の闘いの仲間同士と結成した「本願の会」を通して掲げた「罪の背負い」と言ったような近代に対する精神的克服を目指す動き⁹は結城が言った「近代という化物に取り組み」アクティビズムにかかわるものだろう。

以上に見た通り、石牟礼文学を論じる二つの流れは「戦後の集団的文化運動から水俣病との闘いを経て晩年に至るまで、能動的で抵抗的主体である石牟礼が文学を通して探し求め続けた政治性」という共同の前提に基づいているのがわかる。しかしながら、石牟礼が残した自伝やエッセイ、未刊の日記など書物のなかでは、能動的で抵抗的主体とは全くことなる複雑で分裂的な主体の姿がありありと描か

れている。石牟礼の文学は最終的には水俣病として象徴される「近代という化物」との闘いとしてまとめられるかもしれないが、本稿で紹介する通り書物のなかで石牟礼は記憶に苛まれ、駆り立てられつつも何かを書き留めるためにもがいている。そこで能動性より著しいのは受動性であり、二つはいりまじっており、互いに交代する。従って必要なのは、世の中を「さまよい」ながらも、ある時はこの受動性を切り抜け、石牟礼を書かざるをえなくように駆り立てた「モノ」に対する探究ではないだろうか。本稿はこの「モノ」とは「記憶」ではないかと前提する。詳しく言えば、石牟礼は、幼年期から戦時期を経て戦後に至るまで得た様々な「時代経験」¹⁰が醸し出した記憶に晒されており、またこうした記憶は、固定された形を持たないまま置かれている言説空間と関係性によって再形成される¹¹。

本稿は、こうした石牟礼における「記憶」に基づき、石牟礼文学が「始まる」地点、すなわち石牟礼の最初の作品でありながら代表作でもある『苦海浄土』の中で、石牟礼が初めて水俣病患者と出逢う瞬間を描いた部分に着目し、「この瞬間、何が起きたのか」という問いを設定する。というのは、この瞬間こそ能動的で抵抗的な主体という既存の文学の政治を論じる枠組をもっては収まり切れない、石牟礼における「流民である女」の時代経験が醸し出した「身体化された記憶」が現れる瞬間ではないかと推測するためである。

本稿はこうした問いに対する答えを探るなかで、石牟礼において記憶とはどのようにして形成・再形成され、現れるのか、また石牟礼文学における「別の政治性」はどのように始まるのか、さらにはこれらを可能にするのは何かについて議論する。

本稿はこうした問いと課題に即して、以下の順番をもって展開される。まず、石牟礼が「この瞬間」すなわち水俣病患者たちとの出逢いにいたるまでの時代経験を描きながら、サークル村と高群逸枝思想との出逢いを通して自分自身を「流民である女」と主体化する過程を追跡する（第2・3節）。次に、こうした記憶への回避や排除をめぐる闘いのなかで、言葉にはならないが、身体化される形で石牟礼に根差すようになる記憶の領域を設定する（第4節）。最後には、石牟礼が水俣病患者たちと初めて出逢う瞬間を描いたテキストを分析することで、「この瞬間、何が起きたのか」に対する答えを試す。すなわち、この瞬間に始まった石牟礼ならではの聞き書きのあり方と、既存とは異なる石牟礼文学における政治性の始まりを明らかにし、これを可能にしたものを見出す。（第5・6節）

2. 石牟礼道子における「記憶」と「サークル村」

「サークル村」は1958年9月、九州・山口の数十のサークルから200人余りが

参加し結成されたもので、筑豊炭鉱地帯の福岡県中間市の一軒家に事務局を置き、当時同棲していた森崎和江と谷川雁、作家の上野英信と晴子夫婦が隣住みながら1961年まで同名の機関誌を31冊発行した。1950年代前半、地元で「トントンの会」というサークルを主導していた石牟礼道子も、結成と同時に入会した。水俣の石牟礼の家はサークル村の南の拠点として位置付けられたようだ¹²。

創刊宣言のタイトルを「さらに深く集団の意味を」とつけ、「集団という一つのイメージを決定的な重さで扱うこと」¹³として創刊宣言を括っていることからわかるように、サークル村は鮮やかに「集団」を最も重要な価値として掲げている。これは、この創刊宣言にも言及される丸山真男らが西欧的「市民」としての「個人」の価値を唱えていた戦後に、それまで日本的同質的共同体でファシズムが棲息する元凶とも非難されていた「村」という存在を捉え直そうとする試みであった。これは、近代的個人主義とは別様の主体を見出そうとする共同性への志向であり、サークル村の理論的リーダー格だった谷川雁の有名な文章「原点が存在する」で掲げた「下へ」の働きを通して「国家の思想によって上書きされてしまった民衆の思想を、薄皮を剥がすように復元する」¹⁴ことでもある。サークル村は、このような「共同性」と「下へ」を具現する方法として民衆の生活や労働の「聞き書き」を繰り返して取り上げた。そして、上野英信とこれに関する問題意識を共有していた森崎和江が1959年7月号から元女坑夫たちとの聞き書きである「スラをひく女たち」の連載を始め、石牟礼道子も1960年1月号に「水俣湾漁民のルポルタージュ 奇病」を発表し、それらが『まっくら』（1961年、理論社）と『苦海浄土—わが水俣病』（1969年、講談社）として実を結ぶことになる。

ここで注目に値する点は、石牟礼が『苦海浄土』の原型をなす聞き書きに取り組んでいたのと同じ時期、石牟礼は自分の「流民である女」ということに「記憶」の領域において気づくようになったことだろう。石牟礼は自伝的エッセイといえる「愛情論」を『サークル村』に二度（1959年12月号、翌年3月号）にわたって寄稿する。「愛情論」は自分における「女」という存在の形成の履歴や、そのなかで出会った他者である「流民」の形象を詳細に記している。この文章で石牟礼における「女」には祖母の存在が極めて著しい。祖父の暴力とメカケの存在で気狂いとなった盲目の祖母が原点となり、これを想起する石牟礼の世の中への違和や孤独を生み出している。

気狂いのばばしゃまのお守りは、私がやっていたのです。ばばしゃまは私のお守りをしていていました。そこでふたりはたいがい一緒に、ばばしゃまが私を膝に抱いて、髪の毛のしらみの卵を手さぐりでとってくれたあと、今度はその私のミッチンが後にまわって、白い髪を結ってやりペンペン草などを

さしてやるといった具合でした。ばばしゃまは夏は大がい綿入れの小袖を好み、その着ている小袖から棉を少しずつちぎって捨てるので、私はそれを拾って人形を作りました。ばばしゃまは雪のふる晩はとくに外に出たがり、疲れはてた母たちが寝ると、私はばばしゃまを探しに出ます。珍しくもない気狂いなのでからかう人もなくなった夜ふけにはばばしゃまはふりやんだ雪の中にその夜は立っていました。夜の隅々と照応しているように、雪をかぶった髪が青白く炎立って幽かに光っていて、私はおごそかな気持になり、そっとその手にすがりました。しばらくしてばばしゃまはミッチンかいとしゃがれ声でいいます。遠い遠い風雪の中から伝わってくるようなそのしゃがれ声は、優しさのかぎりでした¹⁵（下線は引用者）。

以上の部分を通して五歳の少女が気狂いの祖母と「一緒に」世の中の境外にいるような雰囲気、さらには祖母の不幸な運命に自分のことを重ね合わせる幼い石牟礼が感じ取れる。また、石牟礼はこの文章で幼年時代に出逢い、自身の人生にかけて絶えなく追体験される「流民」の履歴とその姿を綴る。

不知火海域には、天草流れが色濃く分布しています。やせた日本地図の背骨を下って、下腹部の九州、わけて南九州貧農地帯が妊んでいる天草島、漂着民の歴史、そこから月満たぬ子のように流れ出してきては四散した祖先たちの墳墓への分布図を行ったり来たりするとき、何が道しるべになったでしょう。…… 小学二年まで住んだ水俣町、字、江添、栄町は、その流れ者寄合世帯でした。…… 大方は天草からの流れ者で、父と懇意な飲食店の親方は「せっかく連れてきた女ごやつが、またきゃあ逃げた。五十円がたの損ばい。今度こそ、首に縄つけてでも引っぱってきて働かせてくるっぞ（傍点は石牟礼）¹⁶

チッソの水俣工場進出は1907年だった。石牟礼の祖父である吉田松太郎は石工の親分として天草から一家を率いて1919年水俣の栄町に移り込み、道路整備と港の石積み工事を担当して水俣のまちづくりに大きく貢献したという。石牟礼が住んでいた水俣の栄町はチッソ工場を狙って流れ込んだ「流民の都」だった¹⁷。流民たちはチッソ工場が建設され、「せめてチッソのもたらす光に身を晒すことで、闇から逃れ得ない我が身をなぐさめよう」¹⁸とする願望をもって「流民の都」に流れ込んでいた。この文章の後半部に出てくる石牟礼の家の隣にあった「末広」は、天草から売られてきたからゆきさんたちが娼妓として働く遊郭だった。幼い石牟礼は彼女たちに加えられる侮蔑に深い同情を感じたすえ、「末広の姉さまた

ちのものがなしいうなじに心を奪われていた」と語る¹⁹。ここで「ぼんた」と呼ばれる16歳の少女が石牟礼の同級生の兄でもあった16歳の少年に殺された事件が起こる。半分の暈が血に濡れたまま、ぼんたは死ぬ前に「お母さん」と切なげに叫んだという²⁰。この事件は石牟礼の精神世界に大きな衝撃を与えたようであり、この事件はこの文章のみならず、自伝的小説である『椿の海の記』をはじめとして石牟礼のテキストには頻繁に登場する。

ところが、1959-60年にわたって記したこの「愛情論」には「女」と「流民」が綴られてはいるが、「流民である女」という自己存在への自覚に引き金となる言葉がまだ見当たらない。ここで注目し得る場面は、まだ確立されていない「女」の自我像がその時期には「童女」という形で記憶のなかにたどっていることだろう。石牟礼は「愛情論」の冒頭で結婚12年目にいたった当時感じ取れる愛の在処を少し触れたあと、幼年時代の記憶に入る手前で、「風景の一」と小タイトルをつけ、以下のように書く。

荒げずりな山道を萩のうねりがつつみ、うねりの奥まる泉には野ぶどうのつるがたれ、野ぶどうでうすく染った唇と舌をひらいて、ひとりの童女が泉をのぞいていました。泉の中の肩の後に夕陽がひかり、ひかりの線は肩をつつみ、肩の上はやわらかく重く、心の一番奥の奥までさするように降りてくる身ぶるいでした²¹。

渡辺京二(1969)はこの場面を取り上げ、石牟礼の「強烈なナルシズム」と「何にもたとえようがない孤独」を読み取る²²。本稿の範囲を越える領域ではあるが、石牟礼文学における「自己愛-ナルシズム」とは、美意識と表現の巧みさを決めつける要素でありながら、石牟礼の聞き書きが探し求めた共同性と拮抗する要素としても位置付けられると考える。ここで、確認しておきたいのは、この孤独でナルシスティックな自我像は集団性を掲げるサークル村の言説空間の中でも依然として輝いているという点だろう。

3. 高群逸枝との出逢いによる記憶の再形成—「流民である女」

1961年、雑誌『サークル村』が中断される。その一方、石牟礼自身も地元の水俣病をめぐる闘いに取り組んでいた1964年、石牟礼は女性史家の高群逸枝(1894-1964)の思想と接することになる。石牟礼は、高群の思想と出逢った際の感激を自ら書いた高群の伝記『最後の人—詩人 高群逸枝』(2012)でこう述べている。

天来の孤児を自覚しております私には実体であり認識である母、母たち、妣たちに遭うことが絶対に必要でした。それは閉鎖され続けてきた私の中の女—母性—永遠、愛の系譜にたどり着くことですから、つまり普遍を自分の実体として人類に繋がりたいという止みがたい願望に他ありません。つまり私は自分の精神の系譜の族母、その天性至高さの故に永遠の無垢へと完成されて進化の原理をみごもって復活する女性を逸枝先生に見極めました²³。

高群逸枝との出会い以降、石牟礼の言葉はどう変わったのか。石牟礼は、1965年から渡辺京二が主宰する『熊本風土記』にサークル村時代の聞き書きを書き直す作業に取り組む傍ら、1966年には高群の伝記を書くため東京都世田谷区の高群宅に滞在する。後日、石牟礼は思想史家の藤田省三との対談では「水俣病の問題を追うと同時に高群逸枝さんのものを読み始めた（下線は引用者）」と言ったうえで、高群の思想を「父権によって女たちの感受性が侵略された」という認識に基づいてまとめていることに注目する²⁴。すなわち、石牟礼は水俣病患者との出逢いを流民同士のめぐり逢いとして受け止めた上で、この流民たちを襲った「近代」と「男性的暴力」の世界を見つけ、それと高群の思想が見せてくれる「平和をもたらす族母」の世界を立ち向かわせたのである²⁵。

石牟礼は『最後の人—詩人 高群逸枝』で高群を族母、神女、詩人と呼んでいる。このなかで「族母」は石牟礼自身が大きく影響を受けたと述べる²⁶。高群の名著『女性の歴史』では以下のような存在として提示される。

（族母は）原始日本に存在した、財産共有のうえに樹立された、家庭なるものを知らなかった社会で、すべての男女児を共同保育し、山の峠にホコラを建てて太陽を祭り、老若男女があげて宇宙の神秘に直接的に参画した愛と平和の形態をもった社会を司る存在だった²⁷。

高群が語るこの愛と平和の「族母」は軍事的に君臨する男性支配者とことなっていて『悶え神』のような、社会の脱落者や生活無能者など絶対弱者たちの意識の表現者²⁸だった。これは、高群がいわゆる昭和恐慌期に蔓延していた娘や子供身売りなど流民化される弱い存在を見つめたうえで、日本古代の研究を通して想像した反近代的ユートピアの形象だった。また、水俣病という近代の最悪の暴力と闘っていた当時の石牟礼においてはこの高群こそ「近代の族母」として受け止められ、石牟礼はこうした高群を受け継ごうとするのである。

この「族母」モチーフは『苦海浄土』をふくめてそれ以降の石牟礼の文章に著しく現れる。たとえば、『苦海浄土』第一部の冒頭には水俣病患者の姿を衝撃的

に描いた「山中九平少年」のエピソードが登場する。作家の石牟礼は水俣病にかかって失明し、手足も不自由な山中少年の家を訪れ、少年がたった一人で手さぐりで「野球のけいこ」をしている姿をじっと見守る。そのあと石牟礼は、「私には、この少年とほぼ同じ年齢の息子がいるのであった。激情的になり、ひきゆがむような母性を、私は自分のうちに感じていた」²⁹と書いている。これは、水俣病患者を受け止める石牟礼自身の見方が山中九平のような絶対弱者を見守る族母のそれに他ならないのを自ら宣言することだろう。

このように、石牟礼の水俣病に対する認識の枠組みにはこうした族母の視線が介在する。石牟礼は、水俣の周辺部に住みながら土着民からは「あれは天草のもんだ」と蔑視される漁師たち、「心情的に思えば切ないほど一番水俣を愛していた、(にもかかわらず)水俣市が発展していくにつれて何のおこぼれもえられなかった、恩恵に浴していなかった、そういう優しい人たちが水俣病になるわけ」³⁰と記す。石牟礼は水俣病にかかった漁師たちを「悶え神のような族母」の視線をもって絶対弱者の善良さとして受け止めるのである。さらに石牟礼は、水俣病患者たちが「おおかた、水俣に会社ができれば、水俣はきっと都になるかもしれん、と天草からそんな風に来てきたわけ」といったような、流民であることを明らかにする。『苦海浄土』で一番多く言及される第1部3章「ゆき女きき書」の語り手の坂上ゆき、第4章「天の魚」の語り手の江津野(水俣病にかかった空太郎のお爺さん)はいずれも天草から流れ込んだ人である。第2部と第3部で主要な登場人物である田上義春と川本輝夫は、故郷を離れ長崎と三池で働いてから水俣に戻ってきた人である。

水俣病との出逢いとほぼ同じ時期にあった高群逸枝の思想とのめぐりあいは石牟礼自身の記憶の再形成を果たし、石牟礼は自分自身を明らかに「流民である女」として名付けることにする。1968年『朝日ジャーナル』に寄せた「椿の海の記」(『流民の都』に収める際には「わが不知火」と改題)に書いてある幼年時代の記憶には、1959-60年の「愛情論」とは異なる記憶の枠組みが見受けられる。石牟礼はこどもの頃聞いた父の言葉を以下のように記している。

お前は、親にとっては、みぞか(「可愛い」の天草方言-引用者)子じゃが、おなごに生まれたけんよう聞いておけ。おなごは三界に家なしと定まっておって、お前が育ったこの家も、仮の家で、お前の家じゃないか。嫁御に行ってもそこは自分の家じゃなか。死んであの世に行っても、そこは魂の定まるころではなかぞ³¹(傍点は石牟礼、下線は引用者)。

「おなごは三界に家なし」という表現はサークル村時代には確かになかった言

葉である。何よりも石牟礼は、水俣病の闘いのなかであらためて水俣病の惨状をもたらした根源を探し求めたすえ、サークル村時代から持っていた「女」への自覚と、この「女」が父権によって侵略されてきた歴史の痕跡を、自分の幼年期の記憶の再形成を通して見出したのである。このようにして、石牟礼は自分自身を「流民である女」として主体化するのである。

私の、遊女好きや、かんじん（勸進＝乞食、あるいは狂人）がかつた人間を慕うくせは父の教訓のせいにはちがいない。やがて自分もそのようになり、生涯をさまようのであろう、と思ひこんで育った³²（下線は引用者）。

ここで石牟礼があえて「さまよう」という動詞を使っていることに注目したい。石牟礼の流民たちは『苦海浄土』のなかで「流れる」と「さまよう」の間を行き来する。天草や長崎や、三池や筑豊から水俣に流れ込んだ流民たちは、水俣のチッソ工場から水俣病をめぐる闘いの行路にそって熊本の裁判所、東京のチッソ本社や大阪の株主総会場に至るまでずっと流れる。その一方、石牟礼の流民たちは、世の中の秩序を縁取る近代的原理とは全くことなる世界に追放されたという認識の上で、非近代の記憶に向けて遡ることで、この世とは別の世界をさまようのである。そして、この「さまよい」はおそらく言葉にはならないが、石牟礼の外側に存在しつつ石牟礼に成り代わって自分のことを主張する「記憶」にかかわるだろう。

4. 石牟礼における言葉にならない記憶の在処

ここで確認しておきたいのは、記憶とはあくまでも過去の記録ではなく、「想起の時点において形成された過去の表象」だということである³³。すなわち、石牟礼がであったサークル村という言説空間と関係性で形成された記憶は、以上に見た通り水俣病と高群思想との出逢い以降には、流民である女のさまよいとして再形成されるのである。しかしながら、この「流民である女」という言葉の外側にはまだ言葉にはならない記憶がこぼれ落ちているのではないだろうか。また、この言葉の外側には、族母でありながら流民でもある自分を見守っているナルシスティックな自我像が隣り合わせているのではないだろうか。ここではこうした問題意識に基づき、石牟礼の時代経験が醸し出した言葉にならない記憶の領域について論じる。

1959～60年「サークル村」時代に書いた「愛情論」と1968年書いた「椿の海の記」、そして石牟礼の幼年時代を綴った自伝小説の『椿の海の記』（1976年、

朝日新聞社)や自伝の『葎の渚』を合わせてみると、石牟礼の記憶のなかで回避あるいは排除されている領域があることに気がつく。これは、まとめてみると戦時期の代用教員時代の記憶、また腹違いの兄である白石正晴の存在、そして戦後に三度に渡る自殺未遂事件だろう。これらは、石牟礼において、ある意味でトラウマ記憶を成しているとも言える。トラウマ理論家であるキャシー・カルース(Cathy Caruth)は、トラウマの本質を「死に直面したこと」ではなく、「われ知らずの内にその危機を生き延びてしまったことにある」と言う³⁴。言い換えれば、極限的な出来事から日常生活に生還したからこそ日常と地獄という二つの世界の臨界領域に生きることでトラウマを体験することとなるのである。こうしたトラウマ体験は石牟礼の記憶とどのように絡まり合っているのだろうか。直野章子(2018)は、「トラウマ体験というものがあるのではなく、元の体験の『記憶』がトラウマを生じさせるように作用する」といったフロイトを引用する。³⁵ そのうえで、直野は出来事そのものではなく「第2の契機」とそれが活性化する「幻想」がトラウマ記憶を形成するという³⁶。これは、石牟礼の孤独でナルシスティックな自我像と、その現れでありながら石牟礼文学の特徴的要素ともいえる「幻想的美しさ」が、石牟礼の戦時期や戦後期のさまざまな喪失の経験と深くかかわっているのではないかと思いつかせる。

1940年小学校を卒業した石牟礼は進学を断念し、両親の望みに従うため紡績工場へ就職するつもりだったが、担任教師の説得により水俣実務学校に進学したという。石牟礼は1943年その学校を卒業した後、短い養成期間を経て、その年の秋から1947年の春まで4年余り小学校の代用教員として働く。しかしながら、この代用教員時代の経験のなかで当時の軍国主義的雰囲気やそれにまつわる話に石牟礼が自ら具体的に言及することは、石牟礼の小説のみならず自伝である『葎の渚』や様々なインタビューや対談記事をあげても極めて少ない。やむを得ず少し言及する場合があるものの、概して慎む気配が歴然とする。

晩年に至って石牟礼はようやく代用教員時代を述べることができるようになった。石牟礼は2015-16年に行った伝記作家の米本浩二とのインタビューであの時代をこう回想する。

朝、母が作ってくれた弁当を持って水俣駅に向かいます。汽車が来る。乗らない。登校拒否生徒ではなく登校拒否教師です。教師の仕事が苦しかった。この世が嫌で、嫌で。思いつめておりました³⁷。

また、石牟礼が文章に言及しないもうひとつの記憶がある。第2次大戦中に、父親の吉田亀太郎と前妻との息子で石牟礼には腹違いの兄である白石正晴が吉田

家にあらわれ、一年あまり一緒に過ごしたのち、熊本の陸軍部隊に入り、沖縄で戦死したという。家族構成員たちは、最初は突然現れたこの人にとまどったようだが、白石正晴は周りの人を感心させる「人間としての大きさを備えていたよう」だった。この正晴を祖父の松太郎は「魂が深い」と、母のハルノは「神様の子」とまで言うようになった。石牟礼はそんな正晴を「心から慕い、記憶に頼って描いた似顔絵を遺影の代わりに自分の仕事場に掲げている」という³⁸。自分の書いたものを片付けるには大変苦手なようである石牟礼の文章を整理し研究するため地元の人々が結成した「石牟礼道子資料保存会」が整理した石牟礼の1945年6～7月頃の記事には、「沖縄 玉碎 兄 / 御魂（みたま）はや、このうつしよを去りますか（6月26日）」、「教育者として如何に此の生命捨つべきか。如何に愛すべきか、如何に生かすべきか（7月29日）」と書いてある。

戦後となり、石牟礼は1946～47年の間、三度に渡って自殺を図る。石牟礼は以上に言及した「愛情論」で戦後の自分の自殺未遂についても同じく簡潔で抽象的にふれる。

戦争が終り、その平安な場所は、青春という色をしていて、そこへ行くか死ぬかにしよう。死ぬのに失敗したので、おだやかな光のさしている方に行きました³⁹。

しかし、この話はこれで止まってしまう。それ以降、晩年に行われた米本浩二による石牟礼の伝記編纂に至るまで石牟礼が自分の自殺未遂に言及することはほとんどなかった。そして、米本浩二とのインタビューで石牟礼は以下のように簡潔に述べる。

死にたかった。虚無的な気持ちが小さい頃からありました。なぜ死にたいか。ひとつは、この世が嫌でね。今も嫌ですけど。よく我慢して生きてきたなと思う。悲しい。苦しい。それを背負ってゆくのが人間だと思う。嫌でたまらないから、ものを書かずにいられないのでしょうか⁴⁰。

あの時期は、石牟礼が短歌創作に没頭していた時期であり、また敗戦後ソ連の強制収容所で1年4カ月を過ごした後、帰還した歌人同士の志賀狂太と内密な情緒的交流を続けていた時期でもある。かれは五回にわたる自殺を図った末、この世を去ってしまった。石牟礼はこの時期自分が書いた短歌をまとめて手作りの形で歌集『虹の国』をつくりあげた。この序文にはこう書いてある。

にじの国一。/ これは、あくまで非現実的な夢のそのものです。/ けれどもその国は、どんなに、限りなく美しいものであるか、あなたは御存知ですか。/ 最も美しき園の中に、/ あなたが！住んでいて下さるのです。私のなかにある美しいものが最上の力を注いで作り上げた園に—(傍点は石牟礼、下線は引用者)⁴¹

1947年当時の石牟礼は「あくまでも非現実的な夢」を抱え、自分の美しい園に「あなたが住んで下さる」のを切なく夢見ている。また、この「虹の国」には「私のなかにある」「限りなく美しいもの」といったような、切なくてナルシスティックな雰囲気が漂っている。この時期を経てサークル村で活動していた1959-60年書いた「愛情論」では「終戦後の平安な場所での青春という色」といったようにあの時期を回想する傍ら、泉のなかを凝視する「童女」の孤独でナルシスティックな自画像が描かれている。

つまるところ、石牟礼においてまだ居場所を見つけることができなかつた孤独な自我の外側には言葉の領域に入れないつらい記憶が漂っているのである。石牟礼は幼年時代の記憶に苛まれつつ、戦時期のファシズム時代の傷があり、戦後にもさまざまな喪失の経験があった。ようやく、サークル村との出逢いのきっかけでこの記憶は「女」と「流民」といったような領域に気づくようになった。ところが、依然として言葉にならなかった記憶の余剰は、孤独な内面世界に閉じこめられたまま、時にはナルシスティックな幻想の姿をつけて言葉として現れたのである。要するに、石牟礼の「さまよい」には、言葉にはならないが、逆に身体化された形で根差した記憶が孤独でナルシスティックな自我像の外側に隣接し、揺れ動いているのではないだろうか⁴²。

5. 身体化された記憶の現れと、石牟礼文学の始まり

毎日新聞九州駐在記者時代以来、晩年の石牟礼の側に付き合った米本浩二は、石牟礼を「渚に立つひと」と称する。これには「前近代と近代、この世とあの世、自然と反自然」という境界に石牟礼が立っているという意味が込められている⁴³。米本を含めて長年石牟礼と付き合った人々は石牟礼のこのような精神的気質を水俣方言をもって「漂浪く」と呼んでいる。『証言 水俣病』(2000)の編者である栗原彬(2018)はこの「漂浪く」について「彷徨うこととも言われている。自分の体は漂浪できないから、魂がそこから抜け出して『されく』のだ」と石牟礼が自ら定義したことを紹介する⁴⁴。しかしながら石牟礼のこうした「さまよい」には単に石牟礼の精神的気質や「もう一つのこの世」への願望などとしては取まり切

れないものが揺れ動いているのではないのか。また、逃避や退行の証とも見える石牟礼のナルシスティックな自我像には、第4節で見た通り「美しさ」をもって石牟礼自身を苛まれてきたつらい記憶、そこに働きかけている男性家父長の「流民である女」への暴力、軍国主義ファシズム時代の傷、戦後期の様々な喪失の経験がもたらした死への欲動と立ち向かおうとするエネルギーが帯電しているのではないのか。ここでは、こうした問題意識に基づき、石牟礼が水俣病と出逢う瞬間を描いたテキストを分析する。

石牟礼道子は、1959年5月下旬、水俣市立病院で翌年1月の『サークル村』に収録される「水俣湾漁民のルポルタージュ 奇病」の語り手である坂上ゆきの見舞いをする。石牟礼は坂上ゆきの病状をカルテのメモ書きの形で「手、口唇、口囲の痺感、言語障害、歩行障害、狂躁状態……触覚、痛覚の鈍麻がある」など無味乾燥な表現を羅列した後、こう書いている。

ここではすべてが揺れている。ベットも天井も床も扉も、窓も、窓の向うの山もそれは揺れる気流だった⁴⁵。

石牟礼はこの部分を、5年後の1965年12月～翌年12月まで「空と海の間」というタイトルで渡辺京二が主宰していた『熊本風土記』に連載する際には、このように改稿する⁴⁶。

窓の外には見渡す限り幾重にもくるめいて、かげろうが立っていた。濃い精気を吐き放っている新緑の山々や、やわらかくくねって流れる水俣川や、^{かわら}礮や、熟れるまぎわの麦畑やまだ頭頂に花をつけている青いそら豆畑や、そのような景色を見渡せるここの二階の病棟の窓という窓からいっせいにかげろうがもえたち、五月の水俣は芳香の中の季節だった⁴⁷。

この部分の描写を取り上げて、韓国のエコロジー思想家で評論家の金鐘哲（きむ・じょんちよる、1947-2020）は「もはや消え去ってしまった故郷の美しい風景」に言及しながら「（坂上ゆきのような）近代文明という祭壇に犠牲物となった弱者たちが言葉にはどうにもならない苦しみを背負いつつ、どうしようもなく病床に臥している」と書く⁴⁸。むろん、金のこうした記述には『サークル村』に収録された「奇病」は射程に入っていないし、金が言った通りこの描写の美しさと、これが喚起する坂上ゆきの惨状とのコントラストは著しいと言える。しかしながら、重要なのはふたつの文章を一緒に読むことで感じ取れる、ある「身体的予感」というものではないだろうか。「すべてが揺れている」と呟いたが、ただし身構え

ているばかりだったがゆえにこれ以上の言葉を見つけられなかった予感、5年後書き直す際には風景のなかに溶け込むように、あるいは空気に帯電するようになったのである。「見渡す限り幾重にもくるめいている、かげろう」は、もうすぐ出逢う坂上ゆきの姿を予感させる一方、カルテのメモ書き形で羅列した単語のなかで登場した「狂躁状態」と結びつけられ、祖母から自殺した弟につながる「狂気」にまつわる石牟礼のつらい記憶を引き起したかもしれない⁴⁹。このように風景のなかに溶け込む、あるいは空気に帯電するような「身体的予感」について、韓国の哲学者である高秉権（ご・びょんごん）は、自分がつとめた障碍人夜学での哲学授業の経験に基づき、これを言葉にはならないが強いエネルギーをもって主体を動かす身体化されたものだという。高はこれを「言葉より早めに起き、しかも言葉を聞く前に空気を媒質として先取りに読まれるあるモノ」とまとめる⁵⁰。確かに、『サークル村』の時は、こうした身体的予感につきまとっていた記憶は、まだ言葉にはならなかったようだ。これはただ「すべてが揺れている」といったような、坂上ゆきと石牟礼自身を通底するような身体的感覚をもってあらわれた。ところが、5年後これは、「かげろう」という形で風景のなかで溶け込んだまま後景化されるが、そのなかで「身体的予感」はもっと激しく「くるめく」ことになるのである。

そこで1959年12月には登場しなかった記憶が現れる。この5年の間、石牟礼にはどのような出来事があったのだろうか。評論家である池澤夏樹が作成した石牟礼の年譜には、まず1960年9月の「日本共産党離党」が目立つ。つぎには、1961年5月筑豊へ旅し、谷川雁などが組織した大正行動隊の闘いを見たことが記されている。その中に上野英信と谷川雁の決別、『サークル村』の中断が挟まっている。こうした出来事が石牟礼にどのような影響を与えたのかは明らかではない。ところが、石牟礼がこの時期言葉に非常に飢えていたこと、そして高群逸枝の思想と出逢ってから「族母」の世界を見つけ、自分を「流民である女」と名付けることになったのは以上に見た通りである。

ここで、1965年頃の石牟礼において『サークル村』の時には登場しなかった「身体化された記憶」が言葉をもって現れる。すなわち、1965年の書き直しでは、坂上ゆきの病室でのかげろうを描いたあと、この病室にたどり着くまでに「一方的に出遭いをしていた」ことが新しく登場する。言い換えれば『サークル村』から5年後の時点に再形成された記憶のなかで、石牟礼は坂上ゆきとの出逢いに激しくとまどっているのである。これに関してはサークル村時代の仲間同士だった女性史家の河野信子の証言が参考になると考える。石牟礼は、1958年すでに熊本大学研究班の水俣病に関する報告書を読んで衝撃を受け、「うけ病み」の状態に陥った経験があったのである。その様子を森崎和江が訪ねてみて、「布団をか

ぶって苦しそうに寝ているの。なんとかして起こさなければね」と話したと河野信子は証言する⁵¹。石牟礼のとまどいにはこのようなつらい経験が介在するが、1965年の石牟礼にはどうにかこれらを切り抜けた「身体化された記憶」があらわれるのである。

人びとはまさしくその記述法の通りの声を廊下をはさんだ部屋部屋から高く低く洩らし、そのような人びとがふりしぼっているいまわの気力のようなものが病棟全体にたちまよい、水俣病棟は生ぐさいほら穴のように感ぜられるのである。……（釜鶴松の）病室の半開きになった扉の前を通りかかろうとして、わたくしはなにかかぐろい、生きものの息のようなものを、ふわーっと足元一面に吹きつけられたような気がして、思わず立ちすくんだのである⁵²。（下線は引用者）

確かに、1959年の記憶には坂上ゆきと出逢う前に釜鶴松たちとの出あいはなかった。そして、5年後再形成された記憶にはようやく「生ぐさいほら穴」といったような嗅覚と、「かぐろい生きものの息のようなものを、ふわーっと足元一面に吹きつけられた」といったような圧倒的な力をもった触覚が伴う記憶が言葉をもって現れる。この嗅覚と触覚が喚起した記憶の実体がどのようなものなのかはわからない。ただしここでは「言語のある特定のこまごました部分の質感（テクスチャー）とか効果」⁵³について言及してみよう。石牟礼が釜鶴松たちの病室に通りかかった際、目撃し感じ取れたものは、そもそも圧倒的な力をもって他人事として押し捨てられるはずのものだろう。しかしながら、「生ぐさいほら穴」や「かぐろい生きものの息」という身体性の言葉が持つ質感は、既存の主体を支えてきた秩序を激しく揺さぶる。この崩壊感さえ伴う身体性の言葉の質感はある転倒された領域に石牟礼を導く。石牟礼は引き続き以下のように書いている。

この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ。（下線は引用者）⁵⁴

ここで注目すべきなのは「人間であることの嫌悪感」という表現だろう。なぜ石牟礼はこの場面で自分の人間であることへの嫌悪感に囚われてしまうのか。そこには言葉にはならないが、長い間石牟礼を苦しめた記憶、「流民である女」としての石牟礼が幼年期から戦時期を経て戦後の今にいたるまで闘ってきた死への

欲動や、ナルシスティックな自我像の裏面につきまっていたはずの自己嫌悪の感覚が呼び出されるためではないだろうか。だとすれば、こうした身体化された記憶が釜鶴松たちの惨状とめぐりあうことで引き起こされた嫌悪感はどのようにして自分と他者の区分け、また記憶と立ち向かおうとする能動性と記憶から逃れようとする受動性、さらには「声を漏らす」だけの釜鶴松たちと「言葉」を持つ作家である石牟礼との分離を構成する「感覚的なものの布置」(ジャック・ランシエール)に亀裂をもたらすのか。そこには釜鶴松の「流木じみた姿態」のなかで「山洋のような瞳」を見出す族母でありながら流民である女としての石牟礼の母性が働きかけるだろう。そして、その瞬間現れた石牟礼の身体化された記憶と隣接し、石牟礼の母性を働きかけるようにし、ついには様々な区分けや分離を崩すようにするエネルギーとは、実は「人間である嫌悪感」そのものではないだろうか。石牟礼が釜鶴松たちと出逢ったこの瞬間はある意味で「自分自身への純粋な陶醉」⁵⁵の瞬間でもあるだろう。この純粋な陶醉が持つ力に導かれ、石牟礼は水俣病にまつわる流民の歴史と立ち向かい、これを「身をもって」感じ取れるようになる。特に「人間である嫌悪感」という強烈な情動とこれに対する純粋な陶醉は、死への欲動ではなく、石牟礼自身の「流民である女」の記憶を呼び起こし、これが釜鶴松たちとの間に存在する様々な壁を崩し、そこからかれらは「全部わたくしの中に移り住む」ようになるのではないだろうか。

6. 終わりに

石牟礼が水俣病患者たちと初めて出逢う瞬間、何が起きたのか。要するに、石牟礼の幼年期から戦時期と戦後にいたるまで経験した暴力と喪失、すなわち石牟礼の時代経験が醸し出した「言葉にならない」記憶が現れた。サークル村時代にはまだ明らかではなかったが、高群逸枝思想との出逢いなどを経て自分のことを「流民である女」として明確に主体化していた時点に、「水俣病患者」と「初めて」「病室」で出逢った時、石牟礼における身体化された記憶は現れたのである。

第3節で見た通り、石牟礼は父親から聞いた「おなごは三界に家なしと定まっておって」という言葉を通して自分自身を世の中をさまよう「流民である女」として主体化した。そして、石牟礼は釜鶴松たちの病室で、こうした自身と同じ存在、すなわち世の中の秩序から追放され、さまよっている存在を見つけ、「決して往生できない魂魄」として重ねあわせるのである。釜鶴松たちの病室は耐えられない空間だった。釜鶴松たちは臭いと苦痛の身振りによって水俣病を発信しており、石牟礼を書かざるを得ない心的状態に導いた。このようにして石牟礼は自分の中に移り住んでいる釜鶴松たちの言葉を発することとなり、石牟礼ならではの

の聞き書き、すなわち「聞き書きノートをとったのでも、テープ・レコーダーをまわしたのでもない石牟礼の聞き書き」⁵⁶が始まる。そして石牟礼道子の『苦海浄土』が出発するのである。

この瞬間は、石牟礼文学の別の政治性が始まる起点でもある。石牟礼の聞き書きは、ジャック・ランシエールが言った通り「言葉を用いる人々と苦痛の騒々しい声をあげるだけの人々との違いを無効にする民主主義のエクリチュール(écriture)」⁵⁷を具現したものと見える。ランシエールにおいて政治とは、善悪の区分けを通して倫理的な正しさの体制を構築することではなく、言葉をめぐることのような「違い」をふくめて、既存の秩序を支える「感覚的なものの布置」を変更することだった⁵⁸。そして、既存の秩序はこの「変更」によって変化のきっかけを見つけるのである。

石牟礼が水俣病患者と初めて出逢った瞬間、釜鶴松たちと作家の石牟礼は「共に」自分と他者、能動性と受動性、言葉をめぐることした「違い」を支える感覚的なものの布置を崩すことで文学の政治を担う主体となったと言える。『苦海浄土』が持つ別の政治性とはこうした既存の秩序にかけられた「変更」にあるのではないだろうか。そしてこれを可能にしたのは、釜鶴松たちと自分の重なり合いにかけられた石牟礼の純粋な陶酔の力に他ならない。石牟礼文学が始まる瞬間にはこのような自己愛・ナルシズムが隣接し相補するのである。

だとすれば、石牟礼文学はこれ以降、どのように展開されるのか。『苦海浄土』に絞ってみても、流民である女の身体化された記憶の現れという「始まり」は、これと隣接する自己愛・ナルシズムと拮抗し、時には幻想的美しさの世界に遡行し、現実から逃れる場面もある。石牟礼の他のテキストで自己愛・ナルシズムは、ナショナリズムと結び付けられ、日本古代に対する憧れとしても現れる。こうした石牟礼における「始まり」の展開様相、意味合い、そしてテキスト生成における意図と方法としての「始まり」の理論的位置づけという課題が残っている。これらに対する探究を次回の課題に譲ることで、本稿を締めくくる。

注

- 1 本稿に登場する「流民」は、1960年代以来、出郷したマイノリティの流亡から国家権力や帝国主義に対する攻撃性を見出そうとする同時代の新左翼・ノンセクト系の論調のなかで使われはじめた概念である。これは、明治期以来、資本と帝国によって強いられた労働力の移動の軌跡のなかで「流れる」という動詞の側面、すなわち流亡と土着を繰り返す「流れ」へ注目する概念である。

「流民」と類似する概念と比べていえば、「移民」は移動という行為の行政的意味合いに偏っており、「ディアスポラ」は主権にかかわる概念であるため、それぞれ異なる領域を持つ。また、石牟礼のサークル村時代の仲間同士でもある記録文学者の上野英信などが使っていた「棄民」は国家との関係性(捨てる側と捨てられる側)に注目することで「流民」

- とは異なる響きを持つ。「流民論」の発生と展開については、大畑凜「流民を書く、土地と共に書く」『闘争のインターセクショナル리티—森崎和江と戦後思想史』（青土社、2024年）、pp.130-181 参照。
- 2 これは「石牟礼道子 年譜」『苦海浄土』（河出書房新社、2011年）、pp.4-5 に依拠した。
 - 3 生田省悟「覚醒する『場所の感覚』—人間と自然をめぐる現代日本の言説」『越境するトポス—環境文学序説』（野田研一・結城正美 編、彩流社、2004年）、pp.29-33
 - 4 結城正美「環境文学のエコ＝ロジカルな試み—テリヤ・テンペスト・ウィリアムスと石牟礼道子を中心に」前掲書、p.187
 - 5 ブルース・アレン（相原優子・相原直美 訳）「石牟礼道子『天湖』にみる多次元の世界」前掲書、p.287
 - 6 酒井隆史・佐藤泉 対談「接触と連帯の思想」（『現代思想』2022年11月臨時増刊号、青土社）、p.211
 - 7 結城正美 前掲論文、p.188（初出；イヴァン イリイチ・石牟礼道子対談「希望を語る」（『環』第12号、藤原書店、2003年）、p.254）
 - 8 石牟礼道子「詠嘆へのわかれ」『南風』1959年3月号）、井上洋子「苦海浄土の円環構造」（『現代思想』、青土社、2018年5月号）p.102 から再引用（初出資料は未確保）。
 - 9 これは石牟礼が1998年3月熊本大学でおこなった講演文でよくまとまっている。石牟礼道子「波と樹の語ること」『現代思想』（青土社、2018年5月号）、pp.170-185 参照。
 - 10 「時代経験」とは思想史家の藤田省三（1927-2003）が日本の近現代を「全体主義の時代経験」として取りまとめる際に提示した、経験世界が持つ歴史的性格を指す概念である。近代日本の天皇制研究から研究生活をはじめた藤田は高度経済成長を成し遂げた現代の日本を「集団的ナルシシズムの体制」だと批判しつつ、20世紀の世界を「戦争形態の全体主義」から「政治支配形態の全体主義」を経て、「社会の基礎的次元に達した根本的な全体主義」である「生活様式での全体主義」への展開といったような「全体主義の時代経験」として捉えた。藤田の「時代経験」については、李啓三「藤田省三の思想における『経験』の形成と展開」『同志社グローバル・スタディーズ』第14号（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科、2023年）、pp.181-203 参照。
 - 11 いわゆる「記憶の存在論」は「記憶」を時々主体に呼び出される単なる観念ではなく、主体と別の領域に存在するモノとして、ある物質性を持ちつつ主体に働きかける存在として取り扱う。これは言い換えれば、「主体の統治下になく、固有の力と動きがあり、主体に成り代わって過去を証言する」といったような、主体に対する「記憶」の自律性と独立性を論じる議論である。直野章子「記憶を擁護する」『小特集 記憶の存在論と歴史の地平』（『人文学報』第119号 抜刷、京都大学人文科学研究所、2022年6月）、pp.5-30 参照。
 - 12 米本浩二『評伝 石牟礼道子—渚に立つ人』（新潮文庫、2022年）pp.110-113
 - 13 「創刊宣言」『サークル村』創刊号（1958年9月号）、p.7
 - 14 酒井隆史・佐藤泉 前掲対談、p.218
 - 15 石牟礼道子「愛情論—その一」『サークル村』（1959年12月号）、pp.17-18
 - 16 石牟礼道子「愛情論（二）」『サークル村』（1960年3月号）、pp.6-9
 - 17 米本浩二 前掲書、pp.29-52
 - 18 水溜真由美「石牟礼道子と『流民』」『現代思想』（2018年5月号、青土社）、p.189
 - 19 米本浩二 前掲書、p.41
 - 20 米本浩二 前掲書、pp.41-42
 - 21 石牟礼道子「愛情論—その一」『サークル村』（1959年12月号）、p.17
 - 22 渡辺京二「『苦海浄土』の世界」『もうひとつのこの世—石牟礼道子の宇宙』（弦書房、2013年）、p.27
 - 23 石牟礼道子『最後の人—詩人 高群逸枝』（藤原書店、2012年）、p.248
 - 24 石牟礼道子・藤田省三 対談「文化と風土と人間」『藤田省三対話集成・2』（みすず書房、2006年）、p.280

- 25 高群逸枝のいわゆる「族母論」とこれを受け継いだ石牟礼のつながりについては、西川祐子 前掲論文 pp.175-191 参照。
- 26 米本浩二 前掲書、pp.164-166
- 27 高群逸枝『女性の歴史（下）』（講談社、1972年）、p.281
- 28 石牟礼道子「矢をつける人」『最後の人—詩人高群逸枝』（藤原書店、2012年）、p.390
- 29 石牟礼道子『苦海浄土』（河出書房新社、2018年）、p.13
- 30 石牟礼道子「流民の都・1」『流民の都』（大和書房、1973年）、p.41
- 31 石牟礼道子「わが不知火」前掲書、p.81
- 32 石牟礼道子「わが不知火」前掲書、p.82
- 33 直野章子 前掲論文、p.7
- 34 直野章子「出来事とトラウマの在り処」『トラウマを生きる』（田中雅一・松嶋健 編、京都大学学術出版会、2018）、p.106
- 35 直野章子「記憶を擁護する」『小特集 記憶の存在論と歴史の地平』（『人文学報』第119号 抜刷、京都大学人文科学研究所、2022年6月）、p.14
- 36 直野章子「出来事とトラウマの在り処」『トラウマを生きる』（田中雅一・松嶋健 編、京都大学学術出版会、2018）、pp.90-94
- 37 米本浩二 前掲書、p.66
- 38 米本浩二 前掲書、pp.33-34
- 39 石牟礼道子「愛情論—その一」『サークル村』（1959年12月号）、p.18
- 40 米本浩二 前掲書、p.88
- 41 米本浩二 前掲書、p.80
- 42 記憶が現れる際に、この現れに隣接し相補しつつ、互いに支え合うものがテキストの中にあるのではないだろうか。エドワード・E. サイドは『始まりの現象』で、フロイトやニーチェ、ジェイムズ・ジョイスなどに言及する際、かれらのテキストを構成する要素が相互的に支配と従属するのではなく、「作品の総体と並び、隣り合い、あるいはその間に位置する」ことに注目し、「真の関係は隣接性によるものである」と主張する。エドワード・W. サイド『始まりの現象』（山形和美・小林昌夫 訳、法政大学出版局、1992年）、pp.9-15、pp.90-92 参照。
- 本稿は石牟礼文学においては自己愛-ナルシズム的要素がこうした隣接性と相補性をもってテキストのなかで組み込まれているのではないかと前提する。というのは、この「隣接性」こそ「能動的で抵抗的主体」ではなく「さまよう」存在としての石牟礼において、自身の流民である女の記憶が現れる際の自己愛-ナルシズムの位置性と、この記憶の現れにかかわる役割を解き明かすのに有効だと考えるためである。
- 43 米本浩二 前掲書、p.17
- 44 栗原彬・藤原辰史 対談「化生（けしょう）の音を聴く」（『現代思想』2018年5月号、青土社）、p.80
- 45 石牟礼道子「水俣湾漁民のルポルタージュ 奇病」『サークル村』（1960年1月号）、p.34
- 46 これに関する『熊本風土記』連載当時の資料はまだ確保されていない。ただし、1969年講談社版『苦海浄土—わが水俣病』に収録した石牟礼の後書きと渡辺京二の解説に「この本の原型は『熊本風土記』に連載した「空と海の間」である」という旨の記録があることに依拠して、本稿は1969年講談社版『苦海浄土—わが水俣病』が第1部として収まっている河出書房新社版『苦海浄土』（2018）を定本として採択した。『苦海浄土—わが水俣病』（講談社、1969年）（韓国語版、김경인 옮김, 달팽이, 2007년）pp.291-316 参照。
- 47 石牟礼道子『苦海浄土』（河出書房新社、2018年）p.79
- 48 김종철 「대지로 회귀하는 문학 - 미나마타의 작가 이시무레 미치코」『대지의 상상력』（녹색평론사、2019년）、pp.344-345
- 49 石牟礼は「狂気の持続」というエッセイで、自殺した弟と狂気にまつわる自分の家の血筋を記している。石牟礼道子「狂気の持続」『不知火—石牟礼道子全集・6』（藤原書店、

2004年)、pp.578～579 また、石牟礼は1959-60年『サークル村』に発表した「愛情論」にも、自分の結婚と弟の狂気が関わっていると言う。石牟礼はこう書いている。「祖母の分身を形の上で表しはじめていた弟を私は『守り』しなければならない予感があり、その弟の後により添うようにあたたかく現れた兵隊帰りと結婚式というものをやりました。」石牟礼道子「愛情論—その一」『サークル村』(1959年12月号)、p.18

- 50 고병권 「말의 한계, 특히 ‘옳은 말’의 한계에 대하여」(『묵묵』 들베개, 2019년), pp.34-41
 - 51 米本浩二、前掲書、p.119
 - 52 石牟礼道子『苦海浄土』(河出書房新社、2018年)、p.80
 - 53 イヴ・コソフスキー・セジウィック『タッチング・フィーリング』(岸まどか 訳、小鳥遊書房、2022年)、p.24
 - 54 石牟礼道子 前掲書、p.83
- ランシエールは「昼は労働、夜は労働力の再生産のため休む」という労働者に強いられた感覚的なものの布置に逆らい、詩を詠み、文章を書いた19世紀の労働者たちの動きについて、「(かれらには) 接近不可能なものとして見なされてきたミューズに訴える純粋な陶酔のため、(かれらの作品は) 社会的なものとなる」と喝破する。すなわち、ランシエールはかれらの純粋な陶酔の力が労働者たちの身体に刻み込まれていた感覚的なものの布置を崩し、文学の政治を担う主体になったと見ているのである。자크 랑시에르 『정치적인 것의 가장자리에서』(양창렬 옮김, 길, 2013년), p.11
- 55 西川祐子 前掲論文、p.183
 - 56 ジャック・ランシエール『文学の政治』(森本淳生、水声社、2023年)、p.29
 - 57 랑시에르는そのうえで自分が考える「政治的主体」を「可視的ものと語れるものとの関係、言葉と身体の関係、そして感覚的なものの布置を組み直す能力をもつ存在」と規定した。자크 랑시에르 『자크 랑시에르와의 대화—피곤한 사람들은 어쩔 수 없지!』(박영옥 옮김, 인간사랑, 2020년), p.227

Abstract

The “Beginnings” of Ishimure Michiko’s Literature

– “A Woman Who Is an Exile” and the Appearance of Physicalized Memory

Gyesam YI

Ishimure Michiko became a writer by participating in “Circle Mura” a club movement in the Kyushu region during the postwar period. Through the movement, Ishimure realized that she was “a woman who is an exile”, and shared the style of commonality, which is “listening and writing”, with her peers.

Ishimure has been involved in social movements related to Minamata disease for a long time with the “Exile”, including the patients of Minamata disease and their families, which have spread to the Minamata region since 1959.

It can be said that the discussion and acceptance of Ishimure Michiko’s literature have been conducted mainly in the field of eco-criticism as environmental literature. However, this article focuses on the movements of her “physicalized memory” that had been activated from the ‘beginnings’ of her literature to meeting the female historian Itsue Takamura, and encountering with Minamata disease.

First, this paper examines the formation of Michiko’s memories, which had been shaped through her solitary childhood, her painful experiences of the fascism and war era, and her various losses during the circle movement that came into her life after attempting suicide.

Also, focusing on the concept of “a woman who is an exile”, this paper analyzes the “reconstructed memory”, which came from the thought of Itsue Takamura, whom Michiko met after the strike of the ‘hunger of words’ during her strife against Minamata disease.

Furthermore, this paper sets the moment when Ishimure met Minamata patients for the first time, when she ‘overlapped’ her existence with the patients and fell into the world of Minamata disease by “physicalized memory”,

as the ‘beginnings’ of her literature.

Overall, this paper attempts to demonstrate that the ‘beginnings’ of Michiko’s literature has created a political subject that does not return to the order of the pre-existing subjects.